

瀬名秀明

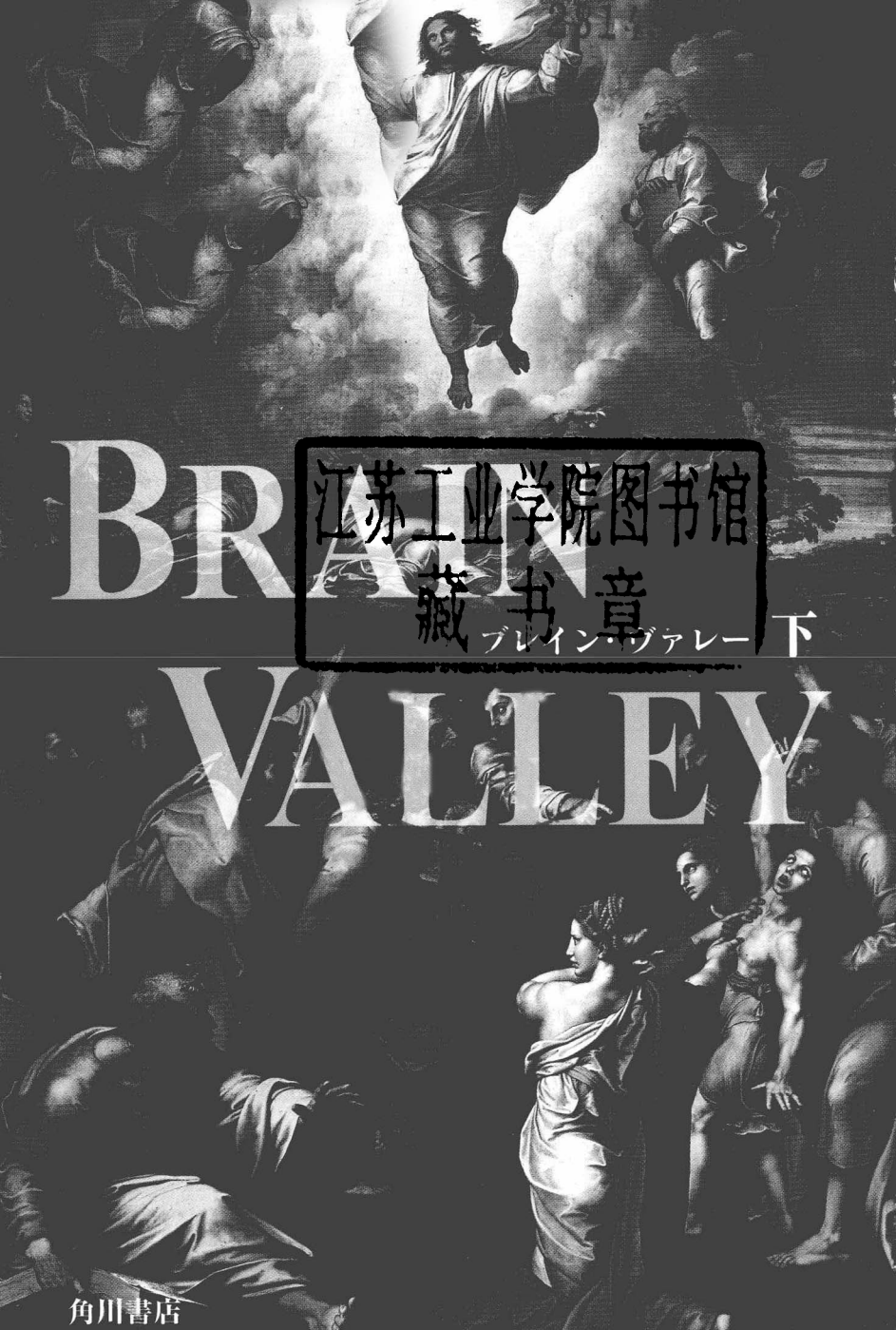
Hideaki Sema

BRAIN

ブレイン・ヴァレー

下

VALLEY



BR AIN VALLEY

江苏工业学院图书馆
藏书章
ブレイン・ヴァレー 下

瀬名秀明（せな・ひであき）

1968年静岡県生まれ。仙台市在住。

95年、「パラサイト・イヴ」で第二回日本ホラー小説大賞受賞。

96年、東北大学大学院薬学研究科（博士課程）修了。

97年4月、宮城大学看護学部常勤講師となる。

その他の作品に「Gene」（アンソロジー「絆」所収、カドカワノベルズ）など。

BRAIN VALLEY（下）



瀬名秀明

1997年12月5日 初版発行

発行者／角川歴彦

発行所／株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3 〒102-8177 振替 00130-9-195208

TEL 営業 03-3238-8521 編集 03-3238-8451

印刷所／暁印刷株式会社

製本所／株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

© Hideaki Sena 1997 Printed in Japan

ISBN4-04-873079-7 C0093

C O N T E N T S

下巻

第二部 オメガ・プロジェクト（承前）…… 5

第三部 キリストの変容…………… 197

エピローグ…………… 394

謝辞…………… 401

主要参考文献

B R A I N V A L L E Y

C O N T E N T S

上巻

プロローグ…………… 5

第一部 ブレインテック…………… 23

第二部 オメガ・プロジェクト…………… 297

カバーCG／河口洋一郎
装丁／角川書店装丁室

BRAIN VALLEY



第二部

オメガ・プロジェクト (承前)

同日九月一九日（金）

ジェイは天井からぶら下がっているファルコン号をほんやりと眺めていた。

エアコンの風を浴びて、ゆっくりと時計回りに回転している。ウォレンが取り付けたブラモデルだった。ウォレンはSF映画が好きなようで、スタートレックのビデオを何十本も持っていたりする。ジェイもバットマンやゴジラは好きだから、ウォレンとそんなに変わらない。

違うのは、ウォレンが大人だということだ。

体格も随分違うし、年も離れている。

「……ねえ」

「ん？」

横でウォレンが答える。聞いているのかいないのかわからないような声。ジェイはファルコン号の動きを眺めたまま訊いた。

「大人って、どうしてなんでもひとりで考えるの」

「……そうかな」

「そうだよ！」

ウォレンのほうを向く。上の空の返事に、つい声が大きくなってしまふ。「ママだってタカオカさんだって、なんかひとりで溜め込んで考えてるんだよ。自分だけで考えたってうまくいきこないのに！」

「そうだな」

ウォレンはパソコンの画面から目を離さない。ジェイは少し苛立ちを感じた。

「大人ってみんなそうなの？」

「そんなことはないだろう」

「じゃあ、研究者の人がそうなの？」

「さあな」ウォレンは少し上を向いて、考えるような素振りを見せた。「うん、医者はどうかな。医者じゃない研究者には、そういう人が多いかもしれない」

「ママは昔ドクターだったんだって。でもママはタカオカさんと一緒だよ」

「いろんな人がいるさ、世の中には」

「……そりゃあ、そうかもしれないけど」

ジェイは溜息をついた。ウォレンまでおかしくなってきたような気がする。このところちつとも会話に乗ってきけてくれないのだ。

ちらりとウォレンのパソコンを盗み見する。画面の中では赤や黄色のドットがちよこちよこと動き回っていた。いつもと同じだ。ウォレンは、先週からずっとこの画面を開いている。

どこが面白いんだろう、とジェイは思った。点と線が動くだけなので、ものすごくチャチに見える。ブロック崩しのほうがまだ良かった。『ファイナル・ファンタジー』や『REBEL

ASSAULT』とは比べものにならない。どうしてウォレンがこんなものに夢中になるのか、ジェイにはさっぱりわからなかった。

デジタル生命。

そういつてたっけ。

点を見つめてみる。しかし、どう考えてもそれはただの点だった。つまらないゲームのことを、日本では「クソゲー」というらしい。この前、テレビでそういつていた。ウォレンが一生懸命観察しているものはクソゲー以下だった。

「ねえ」ジェイはもう一度声をかけた。

「何だい？」

「どうしてなんにもないところから生物が生まれるの？ そのコンピュータの中の生物は、なんにもないところから生まれたわけだね。どうやったら生物ができるの？」

ウォレンがようやくこちらを向いた。苦笑しながら頬ほおを掻くか。「まったく、ジェイ、おまえは将来優秀な科学者になれるよ」

なぜそんなことをいうのかわからなかった。ただ知りたいから聞いてみたただけなのだ。

「コンピュータの中だけじゃないよ。この地球だって、最初は生物がいなかったわけでしょ。でも今は生物がいるよね。どうして？ 最初の生物は誰が産んだの？」

「わからない」

ウォレンがあっさりと降参の格好をしたので、ジェイは拍子抜けしてしまった。ウォレンなら知っていると思っていたのだ。

「そんなのおかしいよ。だって、ウォレンはコンピュータの中に生物を作ったじゃない」

「でも本当にわからないんだよ。わかったらゾンビでも何でも蘇よみがえらせているさ」

「わかる人はいるの？」

「さあね。誰もわからないんじゃないかな」ウォレンは肩を竦すくめた。「生命の最初は原始的なRNAから始まったといわれているけどね。ただし、これも科学者の勝手な憶測だ。第一、どうして突然RNAができたのか、誰も説明できない。基になる化合物は海水の中に溶けていたと思うけど、それがどうやって複雑なRNAの構造になったのかわからない。タイムマシンでも発明されない限り、生命誕生の謎なぞは解けないな」

「ほんとに全然わからないの？　だって、科学者ってたくさんいるんでしょ。たくさんの人が考えてもわからないの？」

ウォレンが大笑いした。そんなに自分がいったことはおかしかっただろうか？

「そんな顔するなよ」ウォレンが笑いながらいった。「手がかりはあるさ。例えば……、そう、キーワードは『複雑性』だ」

「コンプレキシティ？」

舌を噛かみそうな単語だった。発音からしてコンプレキティコンプレキティして

「それと『混沌』カオスだな」

カオス。こちらも不思議な響きだ。コンプレキシティとカオス。まるで呪文じゅもんだ、とジェイは思った。わくわくしてくる。「ねえ、それは何なの？」

ウォレンは横に置いてあったカップを手を取った。中にはコーヒーが半分くらい入っている。

ゆらゆらと立ち昇る白い湯気が見えた。

ウォレンは思わせぶりに右の人差し指を立てた。

「このコーヒークップ。生きていると思うかい」

首を振る。

「じゃあ、中に入っているコーヒー。これはどうだ」

「生物かって？ そんなことあるわけないじゃない」

「そうだ」ウォレンが頷く。「どっちも生物じゃない。どうしてだと思う？」

「えっ？ だって……、カップはモノでしょ？ コーヒーは液体だし……」

「なかなかいい線いってるぞ、ジェイ。その通り。カップは固体だ。ずっとこの形を保っている。自分で動いたり変形したりしない。カップを構成している要素は……、まあ、小さな粒だとも思ってくればいいんだが、その粒は静止状態にあるといい。細かく観察すれば動いているかもしれないが、その場で振動しているだけで、大きく位置を変えることはない。コーヒーはどうかという、こちらは液体だ。一定の形を取ることができない。水の分子はいつもランダムに動き回っている。空気のような気体も同じだね。いいかい、静止状態とランダムな状態。どっちも生物には成り得ない。生物というのは適度に秩序があって、適度にランダムな状態でないといけない。このことはイメージできるかい」

「うーん、なんとなく」

ウォレンはメモ用紙を一枚引き剥がすと、そこにボールペンで楕円形を描いた。その中を線で三つに区切り、左のほうから順に「固定」「周期的」「カオス的」と書き入れた。カオス、という

文字が、ジェイにはひととき新鮮に見えた。

「物質の状態は、だいたいこんな具合に分けることができるんだ。左に行くほど秩序が増して、右に行くほどランダムになると考えてごらん。まず一番左側は固定状態。最終的にひとつの状態に収束してしまう場合だ。次が周期的な状態。時計の振り子みたいな状態だね。このふたつにはきっちりとした秩序がある。コーヒーマップのような固体はここに入ると考えていい。そして、一番右側の状態がカオスだ。ランダムな状態で、動きは予測がつかない。液体や気体はこの部分に入る」

そしてウォレンは、「周期的」と「カオス的」の境目に小さな楕円を描き込み、そこを黒く塗りつぶした。「問題はこの部分だ。秩序とカオスの境界線上。実はここで『複雑さ』コンプレキシティが最大になる。ここから少しでも左に行くと動きが鈍くなる。反対に右へ転がるとばらばらになってしまっ

って收拾がつかなくなる。切り立った山の峰みたいなものさ」

ジェイはボールペンの先を見つめた。固体と液体の間？ そんなのがあったらどうか。

「この領域は、物質の例えでいうと二次相転移の状態だ。部分秩序相という人もいる。まあ、こんな言葉は意味がわからないかな。とにかく、ここが生命の鍵を握っている」ウォレンはその部分の名称をゆっくりと書き加えた。「カオス^{エッジ・オブ・カオス}の縁」だ」

「カオスの縁……」

ジェイはその言葉を口の中で再現してみた。その途端、体の中心から何かが膨らみ、ものすごいスピードで広がってゆくを感じた。

「生命はカオスの縁へと向かってゆく。自己組織化するんだ。秩序状態やカオス状態に転がり落

ちるんじゃないなく、むしろ坂を登って行って、カオスの縁という頂上に辿り着こうとするのさ。生命は偶然にできたわけじゃない。生まれるべくして生まれた——、と考えることもできる。まあ、これも空想だけだね」

頭の中でそれがいつばいにまで膨張し、ばんと音を立ててはじけた。巨大なイメージがジェイの目の前に現れた。天に向かって駆けのぼる急斜面。反り上がった坂道。その切っ先は針のように尖り、宇宙を刺し貫いている。周りには動物たちが溢れていた。キリン、サイ、ゾウ、カエル、ミツバチ、三葉虫、シーラカンス、恐竜、クジラ、ヘビ、チンパンジー、数え切れない。みんな坂の上の一点を見つめ、一心不乱に歩いている。ものすごい斜面を登っている。ジェイの隣にはママがいた。ママは裸で、口を結び、視線を上に向けて、一歩ずつ踏みしめるように歩いている。ママ、と声をかけてみる。でも気づいてくれない。ママ、ママと叫ぶ。そのとき後ろのほうから轟音が近づいてきて、ジェイは振り返る。光の群れが飛んでくる。赤、青、黄色、紫、パソコンのモニタの中でちかちかと光っていたドットが、一列に並んで飛んでくる。ごおおお、という音が真上を通り、あたり一面原色の光に包まれ、その直後に音は一オクターブ下がり、ドットたちは空気を揺き乱しながら切っ先に向かって飛び去って行く。斜面が原色で照らされ、ジェイは息を呑んでその光景を見つめ……。

「はい、今日の講義はここまで」

はっとしてウォレンの人差し指から目を離した。

「えーっ、そんなのないよ。ちゃんと説明してくれるって前にいったじゃない」

「まだ仕事が残ってるんだ。悪いな」

ジェイはしぶしぶ立ち上がった。思いきりふくれ面をして、ランドセルを背負う。バイと手を振ってオフィスを出る。ウォレンはバイを返してくれたが、目はすでにモニタのほうを向いていた。やっぱりデジタル生命たちのことが気になるのだろう。

廊下を歩く。しかし、体から奇妙な興奮が抜けなかった。カオスの縁、という神秘的な言葉が、まだ胸のあたりを刺激している。本当はもっとウォレンからそのことを聞きたかった。頭上を走り抜けてゆくドットたち。

「そうだ」

もう一度、あのコンピュータを見てみよう。

ジェイは駆け足で第二研究施設へと向かった。通路を曲がり、エレベーターに乗り込む。B1のスイッチを押す。箱が緩やかに下降した。

ちん、とチャイムが鳴り、扉が開く。コンクリートが剥き出しになったホールに到着する。白熱灯の光のためか、全体的に黄色っぽく見える。空気は生温かった。少し息苦しい。

ジェイは廊下を走った。ランドセルの中で教科書が飛び跳ねる。キイッ！ という動物の鳴き声が遠くから聞こえた。そういえば、この壁の向こうは動物の実験場だったはずだ。速度を弛め、耳を澄ます。だが、もう鳴き声は聞こえなかった。エアコンの低い唸りだけだ。ジェイは再び速度を上げた。

ここには一度だけ来たことがある。今月の初め、ウォレンに連れてきてもらったのだ。ウォレンの研究は、なんでも特別なコンピュータを使っているいろいろな計算をすることらしい。机の上に置いてあるパソコンは、大きなコンピュータの端末なのだそうだ。ジェイはそれまで、コンピュ